

日本近代化の起点

平成27年3月15日(日)13:30~15:00

別子銅山記念図書館 専門員 坪井利一郎

1. はじめに

初代新居浜市長・白石誉二郎が新居浜を出たことのない「村夫子」として、「この華かな躍進工都の観衆者であってはいけない、少なくともその演出者の一員でなければならないと思う。」と述べ、基幹産業と言っても漁業しかない新居浜の町からマンチェスターを目指す「人為産業=工業」を起こそうとした考えや、「ニューヨークの波は、御代島を打つ波である。」との世界的視野を持つようになった情報をどこから入手したのであろうか。「白石誉二郎翁伝」を読み終わると、大きな疑問がわいてきた。日本近代化の起点はどこからなのかとの疑問とも重なる。

明治4年(1871)の岩倉具視の海外視察に同行した大久保利通が見た英国の富国は貿易と工業化であり、世界最高水準の工業を支えているのは立派な人格者と驚いている。視察する中で保守派の大久保は開明派に考えが変化していく。帰国後、殖産興業化路線を打ち出し先進国の実践に学ぼうとした。明治の富国論の原典となった岩倉具視の海外視察報告書「特命全権大使米欧回覧実録」は明治11年(1878)に刊行後、明治15(1885)までに4刷りが出て3,500部以上が出ている。さらに、大正12年(1923)の東京毎日新聞の記事では78万部以上販売とあり、広く普及していたことが分かる。

2. 岩倉使節団の欧米視察が起点

嘉永6年(1853)、ペリーが黒船で浦賀に来る。翌年の安政元年(1854)、否応なしに開国させられる。幕末期に幕藩営工業として、すでに嘉永3年(1852)には肥後で反射炉が建設され製錬方が設けられていた。その後、安政3年(1856)から鹿児島集成館では鉄砲・蒸気船・電信機の製造がおこなわれ、文久元年に(1861)幕府の長崎製鉄所・造船所が設置されるなど、種々試みられる。

明治維新を画期として日本近代化を行った起点はどこなのか。明治4年(1871)の岩倉使節団による新政府の欧米視察が起点である。新政府を樹立はしたものの、これからどの方向に向かうかの意見が統一されない中で、帝国主義の侵略が当たり前という状況下で対外的な独立を保たなければならない。この難問の解決のために、近代国家としての政治権力と経済構造の原理を探しに先進地のヨーロッパに出かけて行った。アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスを全日程、約1年10ヶ月という長旅であった。まさに、「百聞は一見にしかず。」であった。

岩倉具視を全権大使として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳を全権副使とする総勢46名の大使節団である。留守は、三条実美、西郷隆盛、大隈重信らが守った。久米邦武が「特命全権大使米欧回覧実録」全百巻、五編五冊にまとめた。維新のリーダーたちが目撃した実録とその洞察の報告書である。それはまた、欧米回覧から得た情報を国民に知らすとの情報公開の報告書でもあった。明治11年(1878)に公刊、明治15年(1885)までに四刷まで増刷され、普及版もつくられた。

肥後の製錬方 アヘン戦争が起こり長崎警備を担当する中で、弘化元年(1844)に藩主の鍋島直正がオランダの軍艦を見学して、西洋軍事技術の必要性を再認識する。嘉永3年(1850)、わが国最初の反射炉建設に着工。オランダの「ロイク国立製鉄大砲鑄造所における鑄造法」を翻訳し、それを手引書として、嘉永5年(1852)に良好な溶鉄を製造。

鹿児島集成館 植民地化政策を進める西欧列強のアジア進出に危機感を抱いていた島津斉彬は嘉永4年(1851)に藩主になった。西欧諸国のように軍備の近代化と産業育成の強化を考え、集成館事業を推進した。集成館はその中核の工場群の総称で、反射炉、溶鉱炉、蒸気機関の研究所、ガラス工場などに1200人が働いていたと言われている。嘉永5年(1852)に反射炉建設に着工。安政4年(1857)にようやく鉄製砲の鑄造に成功した。薩英戦争で焼失したが、後継者により復興された。官有、民間払い下げの後、大正4年(1915)に廃止。

長崎製鉄所・造船所 江戸幕府が、安政2年(1855)に長崎海軍伝習所を開設した。そして大型船舶の修理・建造工場として文久元年(1861)に長崎溶鉄所が完成した。25馬力の蒸気機関で工作機械を稼働させた。兵器生産などに必要な製鉄所としての機能を期待したが、実際は船舶の修理を行う造船所の機能が大きかった。明治維新後、長崎造船所と改称。その後、岩崎弥太郎に払い下げられた。三菱工業長崎造船所へと発展した。

3. 各国での見聞

アメリカ

広く自由な大地開拓の実情と文明国の一端垣を観察し、驚くとともに文明開化の原動力は人によることを認識し、科学技術の習得をすれば日本も文明国になれるとの感触をつかむ。猛烈な歓迎行事の好意を誤解して不平等条約の改正交渉をはじめめるが、好意と交渉は別物との苦汁を味わう。

イギリス

アメリカでの時間の浪費でビクトリア女王は避暑に出て謁見できず、スコットランドからの帰りを待つ。その間、大英帝国の最盛期を目のあたりに見る。ロンドンの天を走

る車、地を走る輪の制作の奇工や世界中に広がっている最先端技術の電信・郵便の通信網など、アメリカでの驚きよりも大きな驚きを体験する。世界最高水準の工業に「分業の原理」による生産性の高さを実地見聞で得心するとともに、その担い手のブルジョワジーに驚き、「国の強弱は、人民の貧富による」と殖産興業路線を見出す。産業革命からの遅れをほぼ30年と見るが、後進国として国民全体の知力を合せば追いつけない時間ではないと確信する。工業と貿易による繁栄の影である貧富の激しい差を見て醜悪を覚える。顧みて日本の貧富の差が少なさと比べる。

君主政治、貴族政治、共和政治の微妙な組み合わせを概略理解する。

フランス

今日の姿に改造されたた世界一の麗都・パリを見る。フランスは1年前に新興国プロシヤにまさかの敗北を喫した後であり、パリ・コミューンの乱に傷着いた後であった。封建的大土地所有制度が解体され、自作農がフランス全土に生み出された結果、勤労意欲が高まり生産性を上げたことがフランスの富みの基礎となったのを見る。イギリスと違い貧富の差がないのを商工農のバランスと、地方分散の利と見ると共に農業の重要性を改めて知る。

イギリスでの機械生産でなく、半開世界の工程の手工芸的な生産を見学する。洗練された美、流行の源泉を見る。

ベルギー

小国だと思っていたが、イギリスにも勝る大工場が操業しているのに驚く。大陸を独り占めにしているアメリカ、海に囲まれたイギリスなどと違い大陸では多くの国が国境を接していて緊張関係にあることを知る。しかし、国防意識は高く兵器に熟達している。英仏独の大国の谷間で独立を保っているのは、国民が勤勉で独立心があ、力を合わせているからと見る。

オランダ

資源のない国が粗食にあまんじながら航海に優れて世界で商売をして国を富ましていると見る。人民の勉励和協など小国に学ぶことが多ことを学ぶ。

ドイツ

鉄道と大砲の威力でフランスに勝ったドイツを見学する。「鉄ハ国家ナリ」を認める。そして、後進国で植民地を持っていない、列強に曝されている等、いろいろな意味で日本に似ているところがあり、手本にするのに好都合と見る。

ビスマルクから、「万国公法は大国の利があるときにのみ不変の法であり、いったん不利となると武力で対処する。」と世界支配の論理の核心を聞かされる。

ロシア

領土の広さから世界最強国と見ていたが、政教一致の仮面を以て愚民を役使している不開国と見直す。日本の相対的位置が見えてきた。しっかりと世界の現実を見ておかないと日本の針路を間違えると考える。

デンマーク

かつてバルト海の荒武者だったが、幾たびの戦争に敗けて小国の農業国になったが、海事産業で伸びている。

スウェーデン

離宮を見てフランスの威光が全ヨーロッパに及んでいるのを知る

イタリア

統一イタリアになって3年目のローマで2000年来の遺跡を見てヨーロッパの源流を見ると共に、亡国の思いを感じ取る。

オーストリア

万国博覧会会場でヨーロッパ各国の文明進歩を見て「大も畏れずに足らず、小も侮るべからず。」と今回の視察の意義を察する。

スイス

ヨーロッパ各地からユートピアと賞美されるのを見学して九州各地の名勝をの外国からの評価を理解する。精密工業を発展・確立した勤勉の気風を学ぶ。そして、小国なれど独立を維持している誉れの高さに感じ入る。

3. 我が国の産業革命

明治6年(1873)の政変で「征韓派」が下野し、殖産興業路線が基本国策として採用され、民間人の活動部隊が切り開かれた。先進国の帝国主義国の狭間で存立する小国を手本に、後進国として小国主義を選んでの富国路線であった。

そして、日清戦争、日露戦争を経て重工業の一応の創設を終えて、半開のアジアの中で唯一産業革命を成し遂げ、財閥を形成する。(福沢諭吉が文明・半開・野蛮と3分類した中で、日本は半開。) 明治5年(1872)の岩倉使節団帰国から日露戦争終結の明治38年(1905)までの年数は、34年間である。欧米視察で感じ取ったのは、ほぼ30年間の差であった。産業革命としての蒸気機関の発明からは約100年であったが、技術が実用化される期間の洞察力に眼力があつたといえる。わが国の産業革命をほぼ見込んだ期間で成し遂げている。

その一方で、戦争を経験したがゆえに、国際社会での存立としヨーロッパの列強に伍する大国主義に進む。

4. おわりに

明治維新のリーダーたちが、それまでの書物だけを頼りに成し遂げた方法を越えて、実際に現地に赴き自ら見聞して世界の経済構造を知り、未来への指針を定めた。住友の総理たちも世界に生きる道として「国益に貢献する」道を選んで進んだと言える。そして明治維新のリーダーたちのように、その時々の世界の最先端を見るために欧米視察に自らも赴き、幹部候補生を派遣した。世界に学ぶことを積み重ねて、日本が工業立国、貿易立国と

して世界に立脚するように、住友も世界的な企業に発展してきたと言える。

広瀬幸平	欧米視察	明治22年5月	還暦祝い
鈴木馬左也	第一次欧米視察	明治29年9月	
	第二次欧米視察	大正8年3月	
小倉正恒	欧米視察	明治33年4月	
古田俊之助	欧米出張	大正3年	無期延期
	欧米出張	昭和5年9月	

【参考文献】	日本の産業革命	石井寛治	講談社学術文庫
	岩倉使節団という冒険	泉三郎	文春新書
	小国主義	田中彰	岩波新書
	文明論之概略	福沢諭吉	岩波文庫